



第105号
北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
2022.1.10



2021年10月31日(日)札幌エルプラザにて《第35回定例総会》と《第99回例会》第10回朗読会「午後のポエジア」動画鑑賞会が開かれ、総会には会員13人、鑑賞会には会員・一般合わせて21人が参加しました。

制作した動画20本は後日 YouTube で公開、最初の1カ月半ほどで100~900回超視聴され大成功を収めました。すべての出演者、視聴者のみなさま、共催に加わってくださったポーランド広報文化センター、紙芝居『ブロンシ・ピウスツキ』原版をご提供くださった日本美術技術博物館「マンガ」、動画『オラヴァ』をご提供くださった国立民族合唱舞踊団「シロンスク」のみなさまに深く感謝申し上げます。

(安藤厚、会長)

=写真= 上 登場した詩人・作家・音楽家・舞踊団、下 鑑賞会参加者



制作担当者より

例会「午後のポエジア」は今回10回目の節目にあたります。コロナ禍の自粛ムードは本年も波間を漂いましたが、昨年の中止を一年で納め、ポーランドの詩的言語に触れ合うこの貴重な機会は何としても止めてはいけないという気運も生まれましたので、形式の工夫次第で実施できる動画配信鑑賞の選択肢となり、制作編集を買って出ました。

それは、昨年総会の後に鑑賞した「シロンスク」舞踊団の『EXODUS』の舞踊からあふれ出るポーランドという国の文化哲学的表現の奥行き高みに向き合った、私達なりのアンサーを今年出したかったといえるのかもしれない。

計画当初はそれぞれの持ち寄る動画のパッチワーク的な全体像を想像していましたが、多少は鑑賞にたえ視覚的にも十分楽しめる内容へとシフトしていき、ロケーションの良い海岸を背景とする撮影や、江別のシアター「ども」での舞台演出に拡大されたのは自然な流れでした。

この機会を大いに楽しみ深めたい朗読者の真髄が垣間見え、カメラのファインダーからは朗読に向う精神性の横顔を切り取ることができたと思います。

長屋のり子さんの声と浅野由美子さんの版画作品のコラボは喜び的一幕となりました。

そして編集作業の後半に続々到着したのはポーランドのみなさんのカジュアルな映像。品質の高さとポーランド愛、観る者・聞く者へ寄せる優しい思いが、嬉しく楽しい画像に溢れていました。故国から遠く離れて家庭を築く北海道在住の(いまはワルシャワにお住まいの方もいました)ポーランド人の芯の強さ、豊かさに脱帽です。

動画配信という手法のおかげで、コロナ禍の下、かえってより多くの皆様に「午後のポエジア」をお届けすることができました。まずは本年10回目の節目をこの形式で祝うことが出来て安堵しています。

今後もさらにポーランドのポエジアへの親しみと向学を会員のみなさまとの豊かな交流によりお届けしたいと思います。ご協力いただきましたみなさまに感謝を添えて。

(熊谷敬子)





ニューノーマル・ポエジア

今年の「午後のポエジア」はさまざまな「初めて」に溢れていました。もちろん、同じ空間を共有しない、壁に跳ね返るピアノの音が違う、懇親会の時のポーランドのケーキの匂いはしないなどの点から見ると、もはやいつもと同じ「午後のポエジア」ではないと言えるでしょう。

しかし一方で、私たちはイベントの可能性を広げ、遠く離れていて私たちの年次総会に参加できなかった(あるいは非常に長い間できなかった)人々にも、能動的/受動的な参加の機会が与えられました。

もちろん、生の出演に勝るものはないという意見も多いかもしれません。霜田さんの声の響きとオーラはスクリーンではいつもと違う雰囲気でした。



しかし一方で、録画・録音することで出演者の緊張感がなくなり、声や光を修正できたり、背景に明るい空を見せたり、イラ

ストをクローズアップして見せたりすることができました。

次の「午後のポエジア」はどのようなものになるのでしょうか。パンデミックの経験をどう生かすか気になります。事前録画ではなく「生放送+録画」のハイブリッドイベントにすれば、札幌以外の日本人の方も参加されるのでしょうか？かつて札幌に住んでいて、ポーランドに帰ったポーランド人の姿も見られるのでしょうか？

ポーランドの文化を広めることは当協会の主要な任務です。どのような形になっても、新しい経験を活かして、今後より多くの人々に届けられるものになればいいと思っています。

(ラファウ・ジェブカ、事務局長)=写真左=

オンライン「午後のポエジア」に出演して

ヘルベルトの詩



例年春、朗読会「午後のポエジア」という人気の催しがあり「詩劇ピウスツキ」「宮沢賢治」「私のポーランド」と連続して出演させて貰った。大きな流れに沿って詩の選択、演出、朗読法等は個人の裁量に任せられ、ワクワク心躍る体験だった。亡き斉藤征義氏の病身でのご出演は凄みがあり感動。個人的には声の表情の付け方の指導は貴重な財産となった。

昨年はパンデミックで開催断念。本年は事前収録で私には無理と諦めていたが、霜田氏よりお声が掛かりドラマシアター「ども」で収録。ヘルベルトの詩3作である。衣装や設定を考え取り組んだが未熟であった。もっと突き詰めた練習が必要だった。霜田氏の貴重な助言が活かされていないことを10月31日の「動画を見る会」で思い知った。

他の方々も堂々の朗唱。普段の鍛錬の差であろう。霜田氏の演劇的(時間と声量と音と小道具含めた場)の使い方の巧みさ。長屋氏の大地と交信するが如き響きある朗詠に圧倒される。他の出演者もそれぞれの演出での参加は楽しく時を忘れた。

ミハウさんの「鼻炎」ラファウさんの「蒸気機関車」子供さんの登場も面白かった。「ども」での収録・動画鑑賞会でお世話になった田中茂さんや関係の皆様様に御礼申し上げます。

(菅原三栄子)

スウォヴァツキ詩抄

このたび詩人の長屋のり子さんから『スウォヴァツキ詩抄』をご紹介いただいた。アレクサンドリアの海が題材の作品を選んだので、撮影スタッフの協力を得て、小樽の海辺でロケというなんとも贅沢な朗読・録画となった。

翻訳をされた工藤正廣先生の「あとがき」の情報には目を見張った。詩人は帝政ロシアの支配に抗するポーランド十一月蜂起の後に亡命、一生祖国に帰らず亡命先フランスで夭折。その生涯(1809~49)はみごとにシヨパン(1810~49)と重なる。



死後78年目にユゼフ・ピウスツキ元帥が詩人を国民的英雄とし祖国に遺骨を帰還させ、クラクフのヴァヴェル城大聖堂に埋葬した、その多大の配慮にも感服した。苦難に塗りつぶされた初期ロマン派詩人との遭遇は、私にとって貴重な体験となった。

(氏間多伊子)

凛として美しい詩人

シンボルスカを仰いで

～即興詩～

長屋 のりこ



〔朗読〕 ヴィスワヴァ・シンボルスカ作
「可能性」工藤幸雄訳
〔映像〕 浅野由美子版画作品
「可能性～個人的なユートピア」

経月の 歳月の 重力に逆らって 気品高く
口角を きりっと引き締めて頬に刻む人よ
終生 瞳を 眼差しを 見えない世界にまで向けて
見瞳(ひら)きつづけた人よ。真理と希望を発した詩人よ。
帽子を軽く、深く、豊かなシルバースレートの上に
のせて優雅に微笑む詩人よ。
前世紀の、悲惨のポーランドの血塗られた政治的
歴史の中で、著名な詩人、詩聖達は
亡命先のフランスで 命を閉じたというのに、
シンボルスカは国家が他国の強制に屈し、
そのくびきの下に屈辱的に生きた期間も、ポーランド
を捨てなかった。生涯、ポーランドの 知的中心と
しての古都「クラクフ」を離れなかった。ヴィスワ河を
離れなかった。ヴァヴェル城の街を離れなかった。
そして一見非政治的な詩を記したと見せながら
その実、極めて極めて政治的な 反逆の詩の数々
をクラクフで生んだ。創作した。発信した。それは
ノーベル賞を得たことで 地の果てまで駆けた。
生涯、言葉を探しつづけた詩人よ。
強度を持つ言葉たちで 編まれたその200余の
詩編の射た正鵠の絶対の、揺るがない、確かさ。
1954年のクラクフ市文学賞に始まり、ポーランド文
化賞、そしてゲーテ賞、ヘルダー賞、
1996年のポーランドペンクラブ賞の受賞。
その五日後には、輝くノーベル賞の榮譽をすら射
て。畏敬、信頼やまない 凛然 壮絶の詩人よ。
詩壇のグレタ・ガルボとイタリア紙に、その威厳ある
美貌を称賛され、
今もその詩歌のエレガンスから 詩歌のモーツァルト
と称される詩人よ。燦然の詩人よ。希有な詩人よ。
深刻な主題に 溢れるユーモアをもって、ウィットを
もって その激情を 調和させた詩人よ。
ノーベル賞受賞詩集『橋の上の人たち』は
奇しくも歌川広重から その詩想を発想して

日本人の私に 誇らしく、親しかった。
大学中退、三度の同棲 結婚。その日常の放恣。
チェーンスマーカーであることすらも、その日常の
自然体が愛しく 素敵な 私のシンボルスカ！
あなたへの憧憬は尚も尚も加速する。
その奔放な私生活の経歴だけを
私はなぞっているの。
私は 慕わしいあなたの詩行から 沢山のことを学んだ。
「確信出来ることは美しい。でも確信出来ないこと
はもっと美しい」
「始まりはすべて、続きにすぎない」
「何もない」というと、何もない中に 収まらない何か
が生まれる。
何という簡潔、確信的アフォリズム。警句、箴言。
私に 出来ごとの全ては、途中のページがあけら
れていること、そう、余白の美学を私に 私達に
教えた詩人よ。見えないもうひとつの
世界をひらいてくれた詩人よ。
「見廻すだけで眼に映る奇蹟！」の詩行で、
常在する宇宙に気付かせてくれた詩人よ。
その彫琢された スウォーヴォ(slowo ことば)、
スウォーヴォ、スウォーヴォ
今日、シンボルスカ、あなたに、あなたの詩に
額ずきます。その繊細、犀利に
スウォーヴォ、スウォーヴォ、スウォーヴォ
ひざまずきます。
今宵、小樽の宇宙は
欠けることのないハーベストムーン
地の果てまでを照らし出す月。煌々の月。
凛々の月。シンボルスカの月。
あなたを仰いで、透徹の詩人を仰いで、
私の讃歌は 今日 やまない。
(ながや・のりこ、詩人、本会会員)

ヴィスワヴァ・シンボルスカ (Wisława Szymborska, 1923/7/2~2012/2/1) はポーランドの詩人、随筆家、翻訳家。ノーベル文学賞ほか数多くの文学賞を受賞。彼女は存命中の最も偉大なポーランドの詩人と考えられていた。スウェーデンアカデミー・ノーベル委員会は彼女を「詩歌のモーツァルト」「言葉のエレガンスとベートーヴェンの激情とを調和させつつ、深刻な主題にユーモアをもって取り組む女性」と評した。(ja.wikipedia, Fot. PAP/CAF-Arch 1954)

第 97 回例会報告



講演と交流の集い 石川慶 監督 ポーランド映画の魅力を語る!

ポーランドのウッチ国立映画大学で学んだ石川慶監督にクシシュトフ・ケシロフスキ監督の『デカログ』を中心にポーランド映画の魅力を語っていただきました。

新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が9月未まで延長されたため、急遽、会場を札幌エルプラザから北海道クリスチャンセンターに変更して開催しました。参加者は会員・一般・講師合わせて12人でした。以下は講演の抄録です。

北海道はヨット部に所属していた東北大学時代、北大との交流のために何度も訪れた馴染み深い土地。仙台は岩井俊二監督の出身地でその影響は大きかった。卒業の年が就職難だったこともあり映画の道を志した。

映画を学ぶため世界中の映画学校を調べた。アメリカの学校は学費が高く行けそうもない中、レベルが高くても学費も安く国の支援が得られる旧共産圏の学校に興味をもった。なかでも東西ヨーロッパの両面を併せ持つポーランドに惹かれウッチ映画大学に入学することになった。

ウッチはアンジェイ・ワイダ、ロマン・ポランスキー、ケシロフスキなどポーランドを代表する映画監督のほとんどを輩出している。英国で活動していた『COLD WAR』のパヴリコフスキ監督などは例外的存在だ。ウッチでの実習はすべて35ミリフィルムを使う。2005年に最初の実習作品として、聴覚障害をもつ日本人とポーランド人の夫妻のビデオレターを題材にしたドキュメンタリー『Co slychać?』を制作した(スクリーンで鑑賞)。

ケシロフスキは現在のポーランド映画界に最も大きな影響を与えた監督だ。その影響力はワイダ以上。ケシロフスキは記録映画から出発しているが、日本のドキュメンタリーと異なるのは、フィクション的手法を取り入れている点。ケシロフスキには主題が何であっても自分の目線で作れるという確信がある。

1980年代以降、ケシロフスキは制作の中心をド

キュメンタリーからフィクション作品に移していった。戒厳令下の1981年に『偶然』が上映禁止となり、以後、関心は国外へ向かうようになる。『デカログ』はこの世の中で人間が持ちうる葛藤のカatalogと言っている。自分の中の辞書のようにこれからも見続けていこう。

講演後、シアターキノ代表の中島洋さん(本会員)の進行で、交流会が持たれました。

中島さんはデカログの舞台になっている団地について、高度成長期の日本の住宅事情を絡めて発言。これを受けて石川監督は、ケシロフスキにとっての主題はあくまでも現在のポーランドであり、団地はそうしたケシロフスキの被写体との距離感を示していると述べられました。

また、ケシロフスキ作品から受けた影響についての質問には、簡単には共感させてくれないところ、安易な感情移入を拒否しているところと答えられました。さらに、参加者からケシロフスキ作品へのドストエフスキの影響について発言があったり、中島さんから枝裕和監督が自身の映画監督としての出発点として『トリコロール／青の愛』を挙げているとの紹介があったりと、興味尽きない話の連続で、あっという間に予定の2時間が過ぎました。

石川監督、中島洋さん、お忙しい中、貴重なお話をお聞かせいただきありがとうございました。

(園部真幸)



ケシロフスキ映画とドストエフスキ 池田 光良

ポーランドが生んだ巨匠クシシュトフ・ケシロフスキ監督の作品にはドストエフスキの影響が感じられる。それについて簡単に考察してみたい。

1. 神と魂の不死がなければ全てが許される？

これは『罪と罰』や『カラマーゾフの兄弟』の主要テーマである。ケシロフスキ監督の『デカログ1』では、「死とは心臓の鼓動の停止で魂などない」という大学教授の父と「パパは合理的かもしれないが神はいる」という叔母の間で少年の心の争奪戦が

繰り広げられ、凍結した池で生じた事件を通して標記のテーマが浮び上がる。

2. 心に沁み透る言葉

バフチンがドストエフスキ作品の特徴として「ポリフォニー(多声性)」と「カーニバル」を挙げたことは良く知られている。

もう一つの特徴として彼が指摘したのは「心に沁み透る言葉」と呼ぶ究極の殺し文句である。

心に深い傷を抱く人は、こう言ってほしいと思っていたことをいざ言われると、そこに別の意味が生じて衝撃を受ける。典型例として『カラマーゾフの兄弟』でアリョーシャが「兄さん、父さんを殺したのはあなたじゃない」と言ったとき、イヴァンの中に自分は犯人に殺人教唆をしたのではないか、モスクワに行ったのはアリバイ工作と見られないか、という思いが芽生えて動揺する。

同様の場面はすでに小林秀雄が『罪と罰』についてⅡで描いていた。ラスコーリニコフはソーニヤの表情の中に予期せず殺してしまったリザヴェータ(老婆の妹)の「子供のような」表情を見出して戦慄する。それを見たソーニヤが(無言だが)真犯人は誰かを悟る場面もこのヴァリエーションと見て良い。山城むつみ氏はこれらに対する考察を推し進めて、聞き手に生ずる別の意味を「ラズノグラシエ(違和、不協和)」と呼んでいる。

3. 『デカログ6』における心に沁み透る言葉

『デカログ6』では、純愛が存在しうるのかが問われる。年上の女マグダと、それを望遠鏡で覗く青年トメク。マグダ「私は悪い女よ」→トメク(愛に苦しむ姿を見ていたので)あなたはそんな人ではないという態度を示す→(性行為に至らず)「これが世間で愛と言うものの正体よ」→トメクは深く傷つく→トメクを傷つけてしまったことにマグダはさらに深く傷つく。こ

れが「ポリフォニー」や「心に沁み透る言葉」の表現なのは明らかだ。

以上のドストエフスキー的演技は高度なもので、マグダ役のグラジナ・シャポウォフスカの演技は素晴らしい。これに匹敵するのは『白痴』の原節子(那須妙子役)=写真=、『赤ひげ』の二木てるみ(おとよ=ネリー役)、『ドライブ・マイ・カー』の三浦透子(渡利みさき役)など数少ない。『二人のベロニカ』への『分身』の影響など、他のケシロフスキ作品にドストエフスキー作品の影響を見ることも可能だ。

『デカログ』が公開された後、ケシロフスキは自著で「私たちの内部にあるものをとらえる」という「目標は文学にとっての一大テーマ」で、「そういう本を書いた」のはドストエフスキーとその影響を受けたカミュ、フォークナー、カフカなどと述べていた。「文学はこれを達成できるが、映画はできない。映画は十分に知的ではないのだ」とも。推定どおり、彼はドストエフスキーに強い影響を受けていたのだ。

一方、映画で奇跡を成し遂げた監督としてタルコフスキー、ベルイマン、フェリーニ、ウェルズらを挙げ、自らも映画により人間の深淵を追及した最高の映像作家の一人となったのである。(いけだ・みつよし)

(参考文献)『ドストエフスキーの詩学』バフチン、ちくま学芸文庫、望月・鈴木訳、1995。『ドストエフスキー』山城むつみ、講談社、2010。『ケシロフスキの世界』河出書房新社、和久本訳、1996。

(Krzysztof Kieślowski, Fot. KRZYSZTOF MILLER)



第98回
例会報告

ポーランド名画ビデオ鑑賞会

『COLD WAR あの歌、2つの心』

2018年カンヌ映画祭監督賞、2019年アカデミー賞3部門ノミネートなど数々の栄冠。日本でもファンを感動の渦に巻き込んだ『COLD WAR あの歌、2つの心』。本会でもPOLE99に誌上座談会が掲載され、ビデオ上映を期待する声が上がっていました。

そこで2021年7月にエルプラザで鑑賞会を計画しましたが、コロナ禍のため2度にわたり延期、10月1日ようやく開催の運びとなりました。

緊急事態宣言解除の翌日で、何人が足を運んでくださるか心配でしたが、会員・一般合わせて19人にご参加いただき感動を共にすることができました。上映後は、作品の時代背景など参加者が思い思いに感想を語り合い楽しいひとときとなりました。

(園部真幸)

愛おしい音楽であふれて

映画は滅多に見ないのだが、フライヤーに載っていた座談会の文を読み、見たいと思った。緊急事態宣言などが再三出されたため、三度目の正直での開催だった。

柔らかな素朴なメロディで始まったこの映画はそのあとも愛おしい音楽であふれていた。

鑑賞会のあと参加者の感想を聞く時間が設けられ、歴史や音楽のことなどの豊かな知識とさまざまな視点からの深い洞察に感銘を受けた。感想が聞けて良かったと思った。

私がこの映画で一番印象に残ったのは、映画の最後の部分だ。約90分の映画の世界に浸り込ん

だあと、映像が終わったところで「ゴールドベルク変奏曲」のテーマの部分まるごと流れてきた。これ以上遅く弾いたら止まりそうなくらいのぎりぎりなのだが、先に進んでいくという音のつながり方が極限に心地よく、細部の細部まで聴き入った。視界の先には細かくて読めないキャスト名が、こんなに多くの人が関わっていたのかと思うほど延々と流れていく。それを見ながらの「ゴールドベルク」の組み合わせは絶妙だった。



2つの心と4つの瞳 昼も夜もずっと泣いていた 黒い瞳を濡らすのは 2人がいっしょになれないから オヨヨ～
お母さんに禁じられたの あの人を愛してはいけないと 心が石でできていないから
あの人を忘れることは出来ない オヨヨ～ 私はあの人を抱きしめ、死ぬまで愛するでしょう。

強く深い愛の物語

ポーランドの田舎に伝わる古謡で始まるこの映画は、ポーランドがソ連赤軍によってナチス・ドイツから「解放」された第2次世界大戦後間もない1949～64年までの15年にわたる物語である。

描かれる舞台はポーランドと主にパリ。この時期ヨーロッパは米ソが対峙する冷戦時代で、パヴリコフスキ監督はタイトルを“COLD WAR”とした。しかし「冷戦」は刻まれた時代の記憶であり、描かれているのは「冷戦」の政治状況そのものではない。映画の日本語版には“あの歌、2つの心”という素晴らしいサブタイトルが付いている。“あの歌”によって惹かれ合い結ばれた“2つの心”は冷戦に翻弄され鉄のカーテンで隔てられても、引き裂かれることなく全うされたという強く深い愛の物語なのである。

1949年、物語は地方に残る古い民族音楽の収集に続く民族舞踊団結成のためのオーディションから始まる。団のピアニスト・ヴィクトルは応募したズーラの歌の響きと強い個性に惹かれる。瞬間に2つの心は結ばれ愛を交わす。51年、ワルシャワ公演の成功。上層部の求めに応じスターリン賛歌を演目に加える団長カチマレク、反対するヴィクトル、ズーラも取り込み彼を監視するカチマレク。52年、東ベルリン公演。ヴィクトルはズーラを亡命に誘うが、約束の場所にズーラは現れず、1人で脱出する。

1954年、パリのバー、ジャズ楽団で演奏するヴィクトルの前にズーラが現れる。つかの間の逢瀬。55年、舞踊団のユーゴスラヴィア公演会場へ現れたヴィクトルの失敗。57年、外国人と結婚して母国を脱出、パリに現れたズーラ。二人は愛を確かめ“決して離れられない”と踊る。ヴィクトルはズーラを歌手として売り出すべく、愛人ジュリエットの訳詞で「2つの心…」の曲を吹き込ませる。ズーラはこの都

そして私の心をギュッとつかんだのは、さらに延々と流れるエンドクレジットの中で無音状態が果てしなく続いたこと。全休符が何十小節も続いて最後の休符にフェルマータがついているような終わり方。こんな曲に出会ったことはなかったが、この映画で体験した。無音は音楽以上に強いメッセージを残すという体験だった。そんな感性が好き… (中宮典子)



会的な訳詞に頑なに反発、自分の心がポーランドに深く結ばれているのを悟り、パリに染まったヴィクトルを捨て母国へ去る。

1959年、ポーランドの刑務所、ズーラが訪ねてくる。彼女を追って帰国したヴィクトルは拘束され、指を痛めつけられて15年の刑に服している。

1964年、5年で出所したヴィクトルが舞踊団を訪ねる。今も主役のズーラはカチマレクと結婚し子供を儲け、その代償として夫の政治力でヴィクトルの恩赦を実現してもらったのだ。

ズーラはすべてを捨てヴィクトルとバスで田舎の廃墟の教会へ向かう。二人は聖壇の前で夫となり妻となる誓いを立てる。夫婦となった幸せはこの世にはない。二人は薬を飲み、川の向こうの永遠の世界へと歩いていく。

“父母に捧げる”



年号が示された各々のシーンはそれぞれ独立した短編小説のように完結していて、全体の物語は独特のオムニバス構成となっている。パヴリコフスキ監督はこの物語を自身の両親が歩んだ人生の軌跡をたどり、繋ぎ合わせて作ったのかも知れない。だから“父母に捧げる”という献辞が映画の最後に提示されて効果的だと思う。苦難の歴史を経てきたポーランド、美しい自然、民衆の中で歌い継がれてきた透明な歌の調べ、そのすべてを体現している美しいズーラは監督の若いころの母のイメージであり、映画は母へのオマージュではなからうか。

斬新な手法と美しい音楽、冷戦時代とはいえマズレク舞踊団の芸術性、優れた俳優たち、それ故にこの映画はカンヌ国際映画祭最優秀監督賞を受賞し、数々の映画賞にノミネートされたのである。(小山内道子)

徳田貴子さんのピアノリサイタル「中札内公演」2021/08/29

村田 雄穂



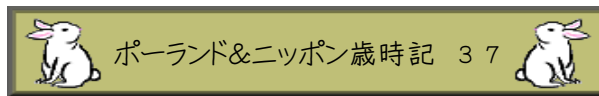
徳田貴子さん(本会会員)が中札内村でピアノリサイタルを開くことを8月になって知り、心は嬉しさと期待で満たされました。

これは何としてでも聴きに行かなければ、と思うと同時に、彼女がわざわざ中札内村にピアノを弾きに来る理由もすぐにわかりました。これは絶対に、彼女が FAZIOLI (ファツィオリ:イタリア製ピアノ)を弾きたいからだ!と。

今回の演目で私のお目当ては、まずシューマンの「クライスレリアーナ」。なかなか生演奏で聴くことができない曲です。

赤の素敵なステージ衣装をまとって舞台に現れた徳田さん、そして FAZIOLI から弾き出される澄んだ音色と愛の情念。数十分間、シューマンの世界に引き込まれました。

もう一つのお目当ては、ラフマニノフのピアノソナタ第2番。力強さと哀愁と優雅さが入り混じる音の世界に浸りました。また帯広・十勝まで演奏に来てください! (むらた・ゆうほ、本会会員、帯広市在住)



それから

前に詠んだプラスチック製の風車は、やがて朝顔の蔓が巻き包み込みました。また、傍に植えた菊は、今年もう二度目の花を咲かせています。

zapach chryzantem 菊の香や
w środku nocy dreptanie 寝巻の夫の
męża w piżamie 小さな歩

Monika Tsuda, Poznań ポズナン市、津田モニカ

zgasły latanie 灯の消えて
w ciemności mgłą utkana 霧で編まれた
droga do pracy 通勤路

Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

一歳の頭上に鯨雲ありて
本もたず妻子ももたず冬木立
冬帝の旅団シベリア越えてくる

岩見沢市、霜田千代磨

《新会員のひと言》

越野 誠 です

このたび、北海道詩人協会員の縁で入会させていただいた越野誠です。室蘭工業大学を卒業したあと企業2社を経て今金町役場へ入庁しました。

ポーランドへは行ったことはありませんが、今金町教育委員会の社会教育事業で訪問したウポポイや直木賞受賞作の『熱源』を読んだり、その当時はポーランドのことを意識していませんでしたが、すぐそばにピウスツキが存在していたことに深い縁を感じております。ウポポイで食べた三平汁の味は記憶に新しいものであり、『熱源』についてはフェイスブックで友だちだった参議院議員が紹介していたりと、心に根を下ろしておりました。

また、YouTuber「かていん」名義のピアニスト角野隼斗さんの動画にも夢中になっておりましたので、ショパンにも知らずふれていたようです。仲の

良い栄養士さんからも、知人のベトナム人が Apple のインターンシップで撮ったショパン像の写真を見せてもらい、マズルカやポロネーズに夢中になっていました。



北海道詩人協会では「北の詩祭」を通して朗読のイロハを経験させていただき、また嗜んでいる短歌の奨励賞で縁のあった杉原千畝や隠岐の島町など、知らずにポーランドが私の背中を支えていることを今回得られた縁によって気づかされました。

コロナ禍や遠方であることから文化協会の事業のすべてに参加することは難しいですが、頂いたご縁を将来につなげていきたいと考えておりますので、どうぞよろしく願い致します。

(こしの・まこと、北海道詩人協会会員)



新刊
紹介



広くポーランド文化関連本や会員の著作をご紹介します

『優しい語り手～ノーベル文学賞記念講演』
オルガ・トカルチュク(著)、小椋彩; 久山宏一(訳)

岩波書店
2021.9

良い書籍との出会いは、いつも私を幸福にする。私事ながら、我が家の地下の書庫には一万数千冊の本が並んでいて、その背表紙を眼で追うだけで陶然となる。どの本も、あなたのために此処にいますよ、あなたのために書かれた本ですよ、と囁きかけてくれる。背表紙とすら、芳しいインチミットな関係が生じている書庫で私は激しく昂揚し、動悸しつづける。所謂、本の虫である。大抵の買物は靴下一枚買うのもためらうのに、本を買う時だけ惜しげがない。本当に潔い。

ポーランド文学、ポストモダンの旗手、トカルチュクに出遭ったのは白水社の『逃亡派』からだったが、確実に心掴まれたのは、岩波書店『迷子の魂』からだった。ヨアンナ・コンセホの絵も美しさを極めた。そのコンセホの装画とあらば、『優しい語り手』に触手が伸びない筈がない。一目散に購入した。

2019年のノーベル文学賞記念講演と2013年の来日記念講演『『中欧』の幻影(ファントム)は文学に映し出される～中欧小説は存在するか』が所収されている。『優しい語り手』は『迷子の魂』と同じ岩波書店から2021年秋に刊行されたもの。全160頁。身体を火照らせながら、これを私は一気に読み了えた。

優しい語り手

「文学は、自分以外の存在へのまさに優しさの上に建てられています」と語り、来日記念講演では「中欧は共通の宗教的、民族的、文化的、言語的アイデンティティを知りません」とし、「文学は形、匂い、成長を、育つ土地に負う植物に似るのです。私は中欧小説は菌糸体の特性を持つ、と言ってみたいのです」と断言する。何という直截な比喻。有機体を模した痛烈な隠喩。初章で彼女は「母」を「かつて魂と名づけられたものを私に与えてくれた。つまり母が授けてくれたのは世界で一番すばらしい優しい語り手だった」と切り出す。「世界は織物です。私達は毎日、大きな織機で小説(アネクドート)を織っている」「私達は多声的な一人称の語りの現実の中に生きて、至る所から多声的なざわめきが聞こえる」——こうして講演の内容を抽出していくと、紙幅がゆるされるならば私はきっとその全行を写し変えることになるだろう。

一行たりとて見落せない、トカルチュクの思惟の気迫、迫力、真率。全行が私のゆるみはじめた脳に鋭く滲み入った。世界を共感や優しさによって繋げ、神話的な物語の力を蘇らせる「第四人称」の語りに講演は加速的に収斂する。神話が私達の精神を作り、私達は神話を無視することができない——という彼女の揺るぎないその確信。優しさは関係するすべてに人格を与えます／優しさは、愛の最も慎ましい形です／優しさは自発的で無欲です。他者を深く受け入れることです／優しさは、私達の間にある結びつきや類似点、同一性に気付かせてくれます——トカルチュクの言葉が心地よく、音楽のように私の体内を巡る。

菌糸体のように生育する中欧文学

「言葉が足りない。視点が足りない。メタファーが足りない。新しい物語が足りない」と彼女に尚も尚も呼びかけられて、私は覚醒する。絶えざる流浪、破局、全体主義を強いられながら、西欧の周縁で、菌糸体のような独自の生育を遂げた中欧文学の魅力にこそ、私達は今、触れなければならないと気付く。

最後に邦訳の小椋彩(ひかる)さん(北海道大学卒業)に、最大限のオマージュを捧げたい。トカルチュクその人が憑依したような、言葉の省察の深遠。そして脚注の高い視点、広い視野に、殆ど驚嘆の思いでいる。表紙装画の、ヨアンナ・コンセホさんにも更なる賞賛の献辞を繰り返したい。その繊細な美しさに溜息やまない。このたびも亦、トカルチュクは、本に出逢う喜び、本という奇蹟、に私を誘ってくれた。あらたな書くことへの深みへ、自分が導かれてゆく予感がしている。境界線を意識的に踏み越えるところから、私は明日、私の意識のネジを巻き直しているだろう。講演だけに一層、生きることの意味の地盤に、直(じ)かに触れた確かな感触が今、私の掌中で熱く疼いている。

(長屋のり子)



『インヴィンシブル』

スタニスワフ・レム(著)、関口時正(訳)

国書刊行会
2021.9

レムとハインライン

『砂漠の惑星』の邦題で広く読まれてきたスタニスワフ・レムの代表作『インヴィンシブル』(原題«Niezwycięzony» 1964)が、ついにポーランド語から翻訳された。原題には「無敵」「不死身」という意味があり、作中では宇宙船の名前として使われている。学生時代、宇宙は人類のためにあるのではないという徹底した認識と、人類の存在を拒絶するかのようになり広げられる機械と機械の黙示録的戦闘の末に焦土と化した惑星をひとりさまよう主人公の姿に惹かれ、私はSFに回心した。そうした読者も数多いに違いない。

さて今回、再読して気づいたのは、アメリカのSF黄金時代を代表するロバート・A・ハインラインの『人形つかい』(1951)との類似と相違である。

『人形つかい』は侵略テーマの古典として知られる。宇宙からナメクジ状の寄生生物が地球に飛来し、人間に寄生して宿主である人間を意のままに操ろうとする。それと戦う主人公たちは、一貫して寄生生物に対し敵対的態度を取り、核兵器の使用も辞さず敵の殲滅を図る。寄生生物の弱点を発見し、地球から掃討することにほぼ成功した人類が宇宙船「アヴェンジャー」(復讐)号に乗り、寄生生物の母星を攻撃すべく出陣する場面で小説は終わる。

レムの小説の世界観

レムの小説が『人形つかい』のような人類中心主義的な世界観と隔絶した地点にあることは明白だが、小説の設定には類似点も多い。舞台となる惑星レギスⅢで遭難した宇宙船の捜索に派遣された「インヴィンシブル」号に、なぜわざわざ反物質砲を備えた巨大な戦闘兵器が搭載されているのか？これはレムの独創ではなく、ハインラインのような小説でまさに描かれていたものである。レムは「どこへ行くにも大量破壊兵器を宇宙船に積んでいなければならないのか？」と主人公に語らせている。これは

先行のSF作品の潮流への批評的挑戦であろう。徹底的に敵対的な関係にありつつ敵対的意図については相互に十分に通じ合うハインラインの小説と、「敵」という認識ではとらえられない関係を描いたレムの小説との間には根本的な相違が存在する。

ところが、そのような相違を超えた類似が存在することも、今回あらためて強く感じた。

人類と個人の葛藤

『インヴィンシブル』の最後で、主人公は遭難した四人を捜索するため死地に赴くことを決断する。しかし、それは上司による軍隊的な規律を背景にした狡猾な策略の結果であり、主人公が選ばれた理由も、一度目の遠征から唯一無事に生還した人間であるからだ。いかにも人間的な顔をしながら非人道的な決断を迫られたのである。実は、これとほぼ同様の場面が『人形つかい』の中にもある。寄生生物にわざと寄生される被験者として主人公が二度目の寄生を迫られるのだ。『人形つかい』の中では、それは英雄的行為として称揚されている。

この類似は一体どういうことか。機械同士の黙示録的戦闘、「キノコ雲」と化した「インヴィンシブル」号の戦闘兵器——これらには20世紀の人類が経験した戦争の

着陸後に消息を絶ったコンドル号の捜索のため琴座の惑星レギスⅢに降り立ったインヴィンシブル号が発見したのは、廃墟と化した《都市》と、砂漠にめり込んでそそり立つ変わりた姿のコンドル号であった。謎に満ちたこの惑星でいったい何が起こったのか！？
---ファースト・コンタクト三部作の傑作『砂漠の惑星』のポーランド語原典からの新訳。

国書刊行会
スタニスワフ・レム・コレクション/第7回記本

苛烈な体験が影を落としている。

しかし問題は、個人の英雄的行為につながるとされる軍隊的規律に対する認識である。惑星レギスⅢの自動機械の集成的な非生命体の活動を前にすれば、人類の知性の特徴とは、集成的知性としての人類と、知的生命体としての個人という二つの次元との往還にあることは明瞭であろう。人は集合であることから、個であることから離れられない。それにもかかわらず、軍隊的規律を背景に主人公がただ個人として死の惑星をさまようことを任務として強制され、神秘的ともいふべき体験をへて、その行動が最後に「インヴィンシブル」(不死身)と呼ばれるのはなぜか。翻訳は鮮明になりつつも、謎はいつそう深い。

(宮風耕治、ロシアSF翻訳家、大阪市在住)

『窓の向こう〜ドクトル・コルチャックの生涯』

アンナ・チェルヴィンスカ-リデル(著)、田村和子(訳)

石風社
2021.5

我が国にはコルチャックの伝記としては、近藤夫妻による伝記(『決定版 コルチャック先生』)や米国のリフトン(『子どもたちの王様〜コルチャック物語』)、独のモニカ・ペルツ(『コルチャック〜私だけ助かるわけにはいかない!』)によるものがあるが、ポーランドでの研究蓄積を前提にした伝記は本書がはじめてである。

本書は主として子どもを含む若者向けの本ではあるが、コルチャックの全生涯をコンパクトに示す優れた作品である。映画『コルチャック先生』(1990 アンジェイ・ワイダ監督)をご覧の方は、そこでの映像を思い起こしながら一挙に読み進めることになる。

開けられた窓 から

“窓の向こう”という本書の書名は、子ども向けの偉人伝を手掛けてきた著者が、コルチャックの作品『開けられた窓』からヒントを得たものである。

現在も残っている孤児院の建物は、第二次大戦中屋根裏部屋のあった5階部分がナチスドイツの空爆によって吹き飛んでしまっただけで今はないが、その部分にコルチャックの書斎があった。とはいえず子どもたちも出入り自由で、彼の不在のときに子どもたちが好んで入ったようだ。本書にも、その書斎に入った子どもたちが彼の設ける障害物を排除して窓辺に向かった様子が描かれている。コルチャックの原典から引用する。



「私には楽しいのだ、子ども達が誘惑する物をいかに巧みに回避するのかあるいはいかに妨害物を一掃するのか、それらを知るのが楽しい。開けられた窓は勝利する。例え風があっても、雨でも、寒くても。トロピズム(注 ウィルスの向性、植物屈性)は藻に対して至るところに密集させ、化学的な親和力のちょうど結晶点のように、上と下に向かってグループを形成することを命じ、ジャガイモの莖に対しては穴倉の壁にそって格子窓をめざして這い回るよう命ずる。その同じ自然の法則は、人々の禁止に反して、囚人を窓へと向かわせる。広がりを目にするためだ。子どもには、運動と空気と光が必要であると、私はこのことに同意する。しかし、まだ必要なものがある。広がり、自由の感性だ。これは開けられた窓だ」(塚本訳“開けられた窓”1926)

1942年、コルチャックと孤児院の子どもたちはゲッソーの中の「囚人」であったが、本書は、過酷な

状況が迫る中、タゴールの戯曲「郵便局」の主人公で重い病の少年の死の受容と病床の「窓の向こう」にある子どもの解放・自由を重ねて終わっている。

日本の子どもたちの思い

窓の向こうにあるものへの“子ども”の思いとホロコーストの現実の落差を私は感じてしまう。映画『コルチャック先生』では最終シーンで子どもたちが一時的にせよ解放されるかのようなシーンが挿入されている。これにも同じような問いを発したくなる。

中学生や高校生はここをどのように見、読みとるのだろうか。日本の子どもたちはどのように読むのか。大学でコルチャックの話をするがほとんど彼のことを知るものはない。本書の出版を子どもたちとの対話を可能にするものとして心から歓迎したい。

訳者田村和子さんは、よく知られているように、ポーランドの青少年向けの文学や絵本などの翻訳紹介の他、コルチャックに関してのみならずホロコーストの歴史をクラクフ中心に研究されており、コルチャックという人物や思想を紹介する本書の訳者としてはこの人をおいて他にないと感じながら本書を熟読しました。

(塚本智宏、札幌国際大特任教授、本会会員)

コルチャック先生のヒューマニズムの原点

感想文を書くなら、真っ白なキャンバスに描くこと、題材は初心であること——知っていることで感動が遮られるのをおそれます。ましてやコルチャック先生に関する、児童向けの本ですから。

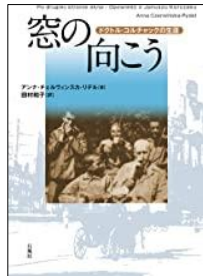
映画『コルチャック先生』のハイライトシーン——幼子を抱きかかえるコルチャック先生を先頭に子ども達が強制収容所へ向かう聖者のような大行進では、頭の中にはリアルな音楽が轟きます。それは成人して以来「アウシュビッツ」というワードに過剰に反応する私だからです。

「子どもの権利条約」という概念の礎となった、子ども法廷による自治の思想。ヘーニョと呼ばれた子ども時代、世界改造計画という哲(さと)りに似た知覚を持ったコルチャック先生の分け隔てない資質。

この時代の地殻変動や歪みを背景に、コルチャック先生のヒューマニズムの原点を描いた伝記を何も知らない真っ白な子どもの心で読み、自己変革の感動的出会いとし、ぜひ感性の柔らかな発達

期にドクトル・コルチャックと巡り合い人格の柱にしてほしいと思います。

コルチャック先生のフィロソフィーの核心は、子ども観、子ども像をどう捉えるかにあるでしょう。アジア、日本、北海道、市町村から学校、学級、家庭までさまざまな関わりの中で、子どもや弱者がいかに幸福に生き、家庭、地域の宝として守られるかという課題には、人の心やいのちのやり取りの砦になる覚悟が問われます。「子どもの権利条約」に反映されたコルチャック先生の生き様が悲運の国ポーランドから生まれた意味を反芻し、コルチャック先生の物語を人類の希望の物語として受け継ぎたいものです。



幸せか不幸か、あるいは今日の関心事でいえば、陽性か陰性か、そんな選別の先っ端(ぼ)で未来を決めてなるものかと、改めて思います。人類の愚かさばかりが私達を覆ってしまうと、結局、生命体誕生の地球の胎動期にまで還ることになるのかもしれない。歴史の因果は連綿とつながり、人智では計れない淘汰という神の領域となるのでしょうか。そこに登場すべき人物は、選ばれし申し子のように、

数奇な運命も顧みない愛の人でしょうか。

空に海に境界を隔てない鳥や魚に倣い、大地に白線を引かない時代・世界が(私の苦手な)ネット支配の先に立ち現れ、人類の価値基準が桁違いに変革されるとき、縄文人・先住民族の言い伝えによる人類存亡の危機の壮大な叙事詩をもコルチャック先生は先見していたのだとしたら、強制収容所での抹殺も恐怖ではなかったのかもしれないと、何か超越論的な救いにすがりたくもなります。

祈らぬ者の祈祷書 から

最後に、本作からコルチャック先生の「神と差し向かいで～祈らぬ者の祈祷書」の一節を引きます。

「わたしは背筋を伸ばして要求します。自己の利益のためではないのですから。

子どもには幸運を与えて下さい。努力する子どもには援助の手を、困難にある子どもには恵みを与えて下さい。安易な道を通って子どもを導くのではなく、美しい道を通って子どもを導いて下さい。

わたしの宝物である悲哀と労働を手付け金として子どもを導いて下さい。それがわたしの願いです。」

(熊谷敬子、本会会員)

『アレクシエーヴィチとの対話～「小さき人々」の声を求めて』 スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ；鎌倉英也；徐京植(著)；沼野恭子(著訳)

岩波書店
2021.6

本書はアレクシエーヴィチのノーベル賞受賞講演、日本を訪れた作家の福島原発事故の取材(2016)、徐京植氏との二度の対談(2000/2016)、東京外国語大学でのレクチャーなど、様々な題材から構成されているが、その核となっているのは2000年に放映されたNHKスペシャル『ロシア：小さき人々の記録』だ。著者のひとりである鎌倉英也が作成した20年近く前の番組だが、書籍化にあたって、長いスパンから作家の創作の軌跡を振り返るようなかたちで再構成されており、新しく多くのことに気づかされる。「亡命」を余儀なくされたアレクシエーヴィチが、滞在先のドイツから序言を寄せていることから明らかなように、昨年の大統領選挙と抗議活動以降のベラルーシの緊迫した政治情勢もまた視野に入っている。

鎌倉は『戦争は女の顔をしていない』(1985)から『チェルノブイリの祈り』(1997)にいたる作品に登場する人物のその後を、アレクシエーヴィチ本人とともにインタビューすることで優れたドキュメンタリーを作り上げた。

本書を読むとこの番組での取材活動そのものが

アレクシエーヴィチのその後の創作の源泉にもなっていたことがわかる。とりわけチメリャン・ジナトフは、自殺の問題を扱った『死に魅入られた人々』(1993)の末尾で引用される新聞記事に名前が出てくるだけだったが、最新作『セカンドハンドの時代』(2013)では重要な登場人物の一人になっている。ジナトフはバシキリア(現バシコルトスタン)生まれのタタール人で、第二次世界大戦の激戦地であるベラルーシのブレスト要塞で戦ってドイツ軍の捕虜となり、戦後は第二シベリア鉄道の建設事業に参加するが、ソ連解体後の状況を嘆いて抗議の意味をこめて自殺した。本書の記述によれば、アレクシエーヴィチはNHKスペシャルの取材で初めてジナトフの遺族に会ったことになる。番組の映像も今回の書籍も作家の創作プロセスを知るための貴重な一次資料を提供しているのだ。

生成するテキスト

アレクシエーヴィチの作品はそもそも完結することのないテク



ストといえる。作品がいったん出来上がって刊行された後でも、インタビューは繰り返され、言葉が書き加えられ、修正された新しい顔を見せていく。『戦争は女の顔をしていない』をめぐる検閲官との対話や、『アフガン帰還兵の証言』が原因で戦死者の遺族から訴えられたアレクシエーヴィチの裁判の記録さえ、生成するテキストの中に取り込まれていくのだ。

日本語で読める文献は充実している。2021年には本書の他にも、松本妙子による新訳『完全版：チェルノブイリの祈り』が出版された。2013年版を

もとにして、初訳よりも大幅に内容が加筆されている。沼野恭子によるNHK「100分de名著」も『戦争は女の顔をしていない』を取り上げた。

アレクシエーヴィチの作品はすでに様々な言語で映画や戯曲に翻案されているが、小梅けいと作画、速水螺旋人監修のマンガ版『戦争は女の顔をしていない』(2019～)の展開も興味深い。翻訳や翻案、視覚化・映像化を通して、アレクシエーヴィチの生み出した世界は広がり続けている。

(越野剛、慶應義塾大学准教授、本会会員)

詩集『タイチの場合』

加藤多一(著)

共育舎(011-780-7113)

2021.3

「詩の言葉」への痛快な一撃

確か小樽詩話会の飲み会であったと思う。加藤多一さんとお話をしていたら「詩の言葉がいちばん素晴らしいのだ」的なことを発言していたことがある。

私自身は自分が「表現者である」ことは自覚している。そしてそれは詩というものらしい。そうであって、例えばお前の書いているものは詩ではないといわれても、あまり気にならない。「詩とは何か」といった定義に関心が無いのだ。

しかし絵本作家として名を成している方が、詩の言葉は別物であると言うことに興味が沸いた。ただその後改めましてお話をする機会もなく、今やコロナ禍で会うことすら難しい。そんななかで加藤さんの詩集に出会う機会を戴いたわけである。

作品「勝内川を歩く」。多喜二をメインに据えつつ、発泡酒にカモメ、スニーカー、温根橋、拓銀と山頭火など、実に数メートルごとの思い出が並ぶ。えらく具体的で説明的でさえありエッセイにも思えるが、一步ごとの余韻に浸る。

作品「ニセアカシア」。どうしてニセなどという名を付けるのかと筆者は憤慨する。本物と偽物の二択にする分かりやすさは、しかしそのとき彼である(木)の本質の名前を考えない愚かしさにいきり立つ。この思考性。問題意識を自分の内側に落とし込み、自分の言葉で繰り出してくる。ただそれは割と主観的な意見の大いなる主張であり、私にはシュプレヒコールに聞こえる。

次いで言葉とか、詩をテーマにしているものを選ぶ。作品「字を書くひと」では、目の前にいるなら話すのだ。しかし携帯電話などない遙かな以前、女は文盲で当然の時代、手紙とは、それは残るものである。読めても書けないという人もいる。現在でも

銀行が嫌いで、さあ名前を書けと言われて躊躇する八十、九十代の方がいるという。書き記すという行為は声にすることとは比較にならないのだ。

作品「文学の光と闇と…」。島崎藤村が東條英機の文案の相談に乗っていたと怒りを露わにするが、作家連中が聖人君子であると私は思わない。むしろ、祭り上げている理由を見極めた方が良い気がする。そうであって筆者にとっての、憧れの文人であり、なおかつ残るべき文字のことであるから簡単には許しそうにはない。

そして作品「信じきったタイチ君」であるが、戦後の新制中学1年生であり新憲法制定の第九条を必死に書き写した世代。あのかの教え“主権在民”は今どこにあるのかと、信じきったタイチ君は戸惑う。痛恨のミスであろう、その“主権在民”は、理念であり単なるコトバでしかない。つまり最初から絵に描いた餅であるのだ。それは実行することでしか形に出来ないものだ。85歳のやせた胸骨をもう一度叩くのみであろう。

こうしたタイチ詩集であるが、これは詩集であろうかとちょっと考えてみる。しかしムラタ的考えでは、これはどうでも良い範疇の疑問である。ちょっと変わっているかなとの印象はあるというところだ。やはり、詩を書いているというその内部にしながら、詩が何かを考えても答えなど出せる気がしない。

そうであって、鳥よりも遙か上空を行く想像する者によって、なによりタイトルが、主張している。『タイチの場合』の詩とは、そして詩集とは、かくなるものである・と実に明確に断言していると読んでしまった。まことに痛快な一撃から始まっているのだ。あはははははは。(村田譲、北海道詩人協会)



「シロンスク」民族合唱舞踊団オンラインコンサート～2021/09/22 公開

〈シロンスク〉との旅 を観て

村田譲、池田光良、氏間多伊子
小川真生、越野誠、中宮典子

- 1.「ポロネーズとマズール」マズルカのステップというのは、フォークダンスのような楽しさであるのだろうか
- 2.「野ばら」シューベルトだけれども、聞いた覚えがあるというのは妙に懐かしく思える
- 3.「ハンガリー舞曲」迫力のある入場シーン、例えようもなくアクティブだ
- 4.「グリーンズリーブス」アイルランド民謡・合唱、中央の男性の声が素敵だ。こういうときは確かに民族衣装の方が良いね
- 5.「アイリッシュダンス」足の動きが繊細で、黒いタイツがまた足を細く見せる。しかしつま先、トウトウ。テンポもあって踊るのがきつそう
- 6.「サ・セ・パリ」パリの小道とのことであるが、落ち着いた雰囲気
- 7.「ハンドの踊り」導入部が面白い、男性のネクタイ(?)を持って踊るんかい？四角く帽子のうえに持ち上げて舞う。密室と成ったり、壁と成ったり。あるようでないような絆のよう
- 8.「アテネ」合唱、アテネのイメージが良く分からないが、明るくておおらかなのかなあ～
- 9.「ゾルバのダンス」ゾルバというと猫のイメージだ。独特の長い節回しが楽しい=上 背景画像=
- 10.「オー・ソレ・ミオ」男性2名、なんというたおやかさ
- 11.「ラ・モンタナラ」合唱、男のみ18名、まあ、堂々と
- 12a.「ダンス、ダンス」(スロヴァキア民謡)まずは男女の歌声、こぶしが効いているけど、踊らないのオ？
- 12.「スロヴァキアのダンス」男女ペアで踊ることが多いのだが、結構激しい踊り。まあ、振付師の考

え方だろうけれど

- 13.「ロマの踊り」2人の女を馬に見立てて、残りは馬車で行く。スカーフ1枚の使い方、長く薄いドレスの見事な扱い方が綺麗

- 14.「クヤヴィアックとオペレック」出だしが特徴的。大胆なリフトはよく見るが、男性が女性の腰を支点に飛ぶという踊り方は見たことないな。女性に抱えられての逆立ち的なのも、すごいな



- 15.「クラコヴィアック」すごく楽し気。女性のスカート回ると提灯の傘のようになるのね



- 16.「ファイナル曲」腰を曲げてのサヨウナラのお別れから始まる、後ろから幾重にも重ねるような厚みを醸し出す。非常に明るい大団円である

いろんな国の踊りがみられるけれど、知らない国の民謡も多い。そうはいいつつ「ゾルバ」と言われて『カモメに飛ぶことを教えた猫』のネコを思い出す。ついでに「ゾルバダンス」も検索するとなかなか面白そうだ。色々な楽しさ、面白さに気付かされる。特に15.「クラコヴィアック」の女性のスカートの広がり方の不思議、13.「ロマの踊り」のコミカルさが好きだ。

(むらた・じょう、本会会員)

まずは踊りの際、体の軸が全くぶれない。厳しい訓練に鍛えられて体幹がしっかりしているからに違いないと感じました。また、ヨーロッパ各地の歌と踊りからは、ケンシロフスキ監督の映画『トリコロール』と同様に、ヨーロッパが繋がっていることを、さらにユダヤやロマといった被差別民族への温かい眼差しを強く感じる事ができました。

最も優れていると思ったのは、No.1, 14, 15のポーランドの伝統舞踊です。これを見てポーランドのことが少しは分ったような気持ちになりました。全体的に優れた歌唱力や振り付け、伝統に根差した衣装も含め、素晴らしい出来だったと思います。

今後とも貴舞踊団の国境を飛び越えるような幅広い活動が世界平和に貢献されることを願ってやみません。
(いけだ・みつよし、本会新会員)

ふと日舞で舞台上に立っていた頃が蘇ってきました。日本舞踊の場合、大別して舞(まい)、踊(おどり)に分けられ、歌舞伎舞踊ができてから振(ふり)という要素も加わりました。また、着物衣装の独特の色合せや文様等は世界でも高く評価され人気があります。



この度のオンライン「〈シロンスク〉との旅」は美しい動きとともに衣装、ヘアスタイルやメイクをより近く画面で確認でき、従来の広いダイナミックな舞台とはまた異なる楽しさを発見。さらに、多様性をテーマにしたヨーロッパ諸国を旅するような構成、聞き覚えのある曲の数々。

舞台芸術には過酷なパンデミックのなか、愛するポーランドからの贈り物は、昏睡状態の心を揺さぶる刺激となりました。
(うじま・たいこ、本会会員)

美しく華やかな色彩と音楽、極上の歌声とダンスに果てしないパワーを感じ、とびきりのひと時を享受しました。

長い歴史に育まれたポーランドを代表するダンス3曲。最初の「ポロネーズとマズール」では凛々しい将校と優雅な貴婦人の洗練された美しい動きに魅了されました。最後の「クヤヴィヤクとオベレック」「クラコヴィアック」は伝統的な民族衣装で身のこなしの全てが美しく、見せ場が山盛りの素晴らしい振付も印象的でした。後者に登場するタタール人の踊りのダイナミックな跳躍に驚き、合唱団の歌声や女声のソロも入って高揚感が伝わってきました。

「ハンガリー舞曲」をダンスで観るのは初めてでした。自由自在に表現できる才能に驚きながら、メロディに乗ったダンスを楽しみました。「アイリッシュダンス」も初めて観ました。ダンサーの衣装もいつもと違う印象で、楽しく美しいステップに目を奪われました。

「ハッシドの踊り」は会話をしながら登場する演出、衣装も魅力的。聴き覚えのある曲も含まれています。白い布を使ったダンスは暗示的な含みを感じました。

「スロヴァキアのダンス」は若さと躍動感に溢れ、「ロマの踊り」はスカーフを工夫して2頭の馬と馬車を作ったりコミカルな動きがあったりとユニークでした。

ギリシャの「ゾルバ」は気迫に満ちた出だしから魅了されました。男性のみで、ソロから始まり3人、9人と増えて、音楽に乗った全員の素晴らしいステップ、ソロダンサーの動きも素晴らしく、かっこよすぎです！



「野ばら」(ドイツ)「グリーンスリーブス」(アイルランド)「アテネ」(ギリシャ)「サ・セ・パリ」(フランス)「ダンス、ダンス」(スロヴァキア)「ラ・モンタナラ」(イタリア)と素敵に歌い上げて、贅沢な旅をさせていただき幸せです。

皆様の温かい心に感謝いたします。

(おがわ・まき、フォークダンス愛好家、本会会員)



=左から=アイリッシュダンス/グリーンスリーブス/ダンス、ダンス/アテネ/ロマの踊り

感想を書くにあたり、岡上理恵著『中欧の不死鳥～ポーランド不屈の千年史』(出窓社、2019.4)を参考にさせていただきました。

冒頭から登場するポーランド将校と思われる男性と対になる女性たち。華麗な舞はエカチェリーナ率いるロシア軍による第1次ポーランド分割前の幸せなポーランドの国民性を表していると感じました。

続く「野ばら」も同様で、ブラームスのハンガリー舞曲からもその優位性と陽気さが感じられました。ブラームスはワーグナーを崇敬していて、どちらもゲルマン民族を背景に持つドイツ人であり、ポーランドはロシアの統治やドイツの占領下にあった歴史を考えると、政治に翻弄され苦しみに耐えながらも、ささやかな暮らしを家族や村の民と共有するために、生の実感やしあわせを謳歌しようとする、ポーランド国民の前向きな姿勢がここに表れていると感じられました。

日本国旗と同じ赤と白で描かれるポーランド国旗。民族衣装の様相や国旗の清々しさは、ポーランド国民を迫害から救った日本の精神に通じるものであり、親日国を表す端的な動画であると感じました。

未だポーランドを訪れたことのない私とその国民性を感じるのには可笑しいかもしれませんが、日本精神と同じ東欧における美国、それがポーランドだとこの動画で理解できました。(こしの・まこと、本会会員)

これぞ「ポーランド」というポロネーズステップから始まった。1拍目の前の拍(弱拍)で沈み、次の1拍目(強拍)で伸び上がるのが揃って綺麗だった。今までごこちなく膝の屈伸をしていたのだが、コツが分かった気がした。

かと思いきや **Sah ein Knab' ein Röslein...** と美しい歌声が響く。シューベルトの「野ばら」だ。〈シロンスク〉は合唱団としても素晴らしいことを知った。さらに「オー・ツ・レ・ミオ」の男性ソロ2人の歌声が魅力的で、ますます聴き惚れた。2曲とも懐かしくて、つられて一緒に歌ってしまった。久しぶりに歌って楽しかった。

「ハッシドの踊り」でも聞き覚えのあるメロディが。フォークダンスサークルで踊っている「ハバナギラ」(ヘブライ語の民謡)だ。この曲は東京オリンピックの新体操で金メダルを取ったイスラエルの選手も最後のリボンの演技で使っていた。イスラエルでは人気曲なのだろうか。

ポーランドのみならず、各国の歌と踊りを高水準で楽しめるなんて驚きだ。

(なかみや・のりこ、ダンス愛好家)



ポーランド広報文化センター
Instytut Polski w Tokio



◆2021年9月1日にウルシュラ・オスミツカ所長が就任されました。私たちには、所長は2013年の白老におけるプロニスワフ・ピウスツキ記念碑除幕式以来のご縁があります。
◆12月1日駐日ポーランド共和国大使館で、ポーランド広報文化センター設立10周年ガラ・ディナーが行われ、バヴェウ・ミレフスキ大使、オスミツカ所長、中曾根弘文

参議院日本ポーランド友好議員連盟会長ら約50人が10周年を祝いました。第18回フリデリク・ショパン国際ピアノコンクール入賞者・反田恭平さん(札幌市生まれ)と小林愛実さんによる演奏が来場者への大きなサプライズとなりました。本会からは霜田英麿東京事務所長がお祝いに参加しました。



=写真=センター職員のみなさん © Maciej Komorowski

ご寄付 (2021.9~12) 感謝申し上げます

(1口千円、敬称略) (7) 霜田千代麿 (2) 安藤厚、安藤むつみ、安藤瞬、石田レイ子、小山内道子、栗原朋友子、小林暁子、土橋芳美、村田雄穂、山本伸一 (1) 小島智代、佐々木保子、徳田貴子、名取百合子、前田理絵、和田芳子

会員動向 (~2022.1)

入会: 浅野由美子、池田光良、上田隆弘、菊池竜太、越野誠
退会: 小島智代、斎田道子(敬称略)
逝去: 富山信夫さん(謹んでご冥福をお祈りします)

今年度 (2021.9~2022.8) 会費納入のお願い

年会費 (一般 3,000 円、学生 1,500 円)
また、維持会費としてご寄付(1口千円)も承ります。
【ゆうちょ銀行振替口座】記号 02740 5 番号 19735
【加入者名】北海道ポーランド文化協会 または
【北洋銀行(本店営業部)普通預金口座】
【店番号】028【口座番号】0605084
【名義】ホッカイドウポーランドブンカキョウカイ
北海道ポーランド文化協会 会長 安藤厚
※ご請求額は個別の納入依頼(振替用紙同封)をご覧ください。
※遠方の方はご寄付 年千円で会誌 POLE の定期贈呈も承ります。事務局にお問合せください。

POLE105 目次

第10回「午後のポエジア」～第35回総会記念朗読会～報告(安藤厚、熊谷敬子、ラファウ・ジェブカ、菅原三栄子、氏間多伊子)..... 1
凜として美しい詩人シンボルスカを仰いで～即興詩～(長屋のり子)..... 3
《第97回例会》報告:講演と交流の集い「石川慶監督ポーランド映画の魅力語る!」(園部真幸)／
キェシロフスキ映画とドストエフスキー(池田光良)..... 4
《第98回例会》報告:ポーランド名画ビデオ鑑賞会『COLD WAR あの歌、2つの心』(園部真幸、
中宮典子、小山内道子)..... 5
徳田貴子さんのピアノリサイタル「中札内公演」(村田雄穂)／ポーランド&ニッポン歳時記37
(津田モニカ、ピョートル・ヴジェチョノ、霜田千代麿)／《新会員のひと言》(越野誠)..... 7
《新刊紹介》『優しい語り手～ノーベル文学賞記念講演』(長屋のり子)／『インヴィンシブル』(宮風耕治)..... 8
『窓の向こう～ドクトル・コルチャックの生涯』(塚本智宏、熊谷敬子)／『アレクシエーヴィチと
の対話～「小さき人々」の声を求めて』(越野剛)／『詩集 タイチの場合』(村田譲)..... 10
〈シロンスク〉との旅と EXODUS を観て(松井亜樹)..... 13
「シロンスク」民族合唱舞踊団オンラインコンサート〈シロンスク〉との旅を観て(村田譲、池田光良、
氏間多伊子、小川真生、越野誠、中宮典子)..... 14
ポーランド広報文化センター:新所長、設立10周年ガラ・ディナー..... 16
第35回定例総会議案.....別紙 17

発行 北海道ポーランド文化協会

〒060-0018 札幌市中央区北 18 条西 15 丁目 3-19 安藤方
電話・FAX 011-556-8834, hokkaidopolandca@gmail.com

東京事務所 〒107-0052 東京都港区赤坂 9-6-29-309 音響計画(株) 霜田気付
電話 03-6804-1058 FAX 03-6804-6058

ポーレ編集委員会



安藤厚／新井藤子
氏間多伊子／熊谷敬子
塚本智宏／松山敏

第35回定例総会議案

(議長 尾形芳秀)

2021年10月31日、札幌エルプラザにて、会員13名が出席して全議案が賛成多数で承認されました。

[第1号議案]2021年度(2020.9-2021.8)活動報告
について(ラファウ・ジェブカ)1.《第34回定例総会》&《第96回例会》ポーランド国立
民族合唱舞踊団「シロンスク」オンライン公演動画鑑
賞会、札幌エルプラザ、2020年11月21日(土)総会
13:30~例会15:00~(参加者)総会12人、動画鑑
賞会29人

2.例会等

新型コロナ禍のため上記《第96回例会》のみ

3.会誌 POLE No.101(2020.9.1)、No.102(2021.1.
5)、No.103(5.1)発行

4.運営委員会①2021.4.29(書面)②7.13

5.後援事業等

(1)〈後援〉川染雅嗣ピアノリサイタル in アルテピアッツ
ァ美唄 Vol.II~ベートーヴェン生誕250年・ショパン
生誕210年、連弾客演:柘原享子、安田侃彫刻美術
館アルテピアッツァ美唄アートスペース、2020年9月
13日(土)(2)〈後援〉華衣会第参會~木村雅信楽曲によるリメイク
ドレスショーコンサート、札幌文化芸術交流センター
SCARTS コート、10月22日(木)(3)〈後援〉徳田貴子ピアノリサイタル~幻想曲のタベ、
札幌 ザ・ルーテルホール、12月6日(日)/恵庭 夢
創館、11月15日(日)(4)〈後援〉アマレヤ劇団ほか主催ウェビナー①「アイヌ
民族とポーランド人~プロニスワフ・ピウスツキは現代
ポーランドと日本に何を遺したか」12月18日(金)②
「女性の声~ポーランド、日本、スカンジナビアにおけ
るアートとアクティビズム」12月19日(土)(5)〈協力〉「シロンスク」舞踊団 弦楽四重奏映画音楽
オンラインコンサート2021年1月23日(土)(6)〈協力〉プロニスワフ・ピウスツキ103年忌(献花)、ウ
ポポイ(民族共生象徴空間)記念像前、5月16日(日)(7)〈協力〉「シロンスク」舞踊団 ポーランド愛国の歌オ
ンラインコンサート、6月22日(火)7.会員動向(2021年度)入会3人、退会5人、逝去3人
(2021.9.1現在)会員数94人[第2号議案]2020年度収支決算報告および会計監査報告
について(園部真幸・稲川和幸・嵩文彦)別紙 p.19参照[第3号議案]会則改正及び「総会・運営委員会につい
ての申し合わせ」新設について(安藤厚)

1.会則改正案

(1)第15条(改正前)本会に事務局、会誌編集委員会
および各種の事業を推進するための部会をおくことが
できる。〈後略〉(改正後)本会に事務局、編集委員会、広報委員会およ
び各種の事業を推進するための部会をおくことができ
る。〈後略〉

2.「会費についての細則」改正案

(1)4.(改正前)〈前略〉会員相互の連絡を促進するため、
会員名簿を会員に配布することができる。〈後略〉(改正後)〈前略〉会員への連絡のため、会員名簿を役員等で共有することができる。〈後略〉

3.総会・運営委員会についての申し合わせ(新設)

1.総会は委任状を含めて3分の1を超える会員の出席
をもって成立する。2.書面による運営委員会は構成員の過半数の賛成によ
り議決する。[第4号議案]2022年度(2021.9-2022.8)役員等(案)
について(安藤厚) 新任

(会則第6条に基づく役員)

会 長:安藤厚

副会長:霜田千代磨

運営委員:新井藤子、安藤むつみ、氏間多伊子、小笠
原正明、熊谷敬子、小林暁子、小林浩子、坂田朋優、
佐々木保子、霜田英磨、園部真幸、塚本智宏、徳田
貴子、中島洋、アグニエシュカ・ポヒワ、松山敏

事務局長:ラファウ・ジェブカ

監査委員:稲川和幸、嵩文彦

(会則第15条に基づく事務局、編集委員会、広報委員会)

事務局:(事務局長)ラファウ・ジェブカ、(副事務局長・
会計)園部真幸、(催物)氏間多伊子、(同)熊谷敬子編集委員会:安藤厚、新井藤子、氏間多伊子、熊谷敬
子、塚本智宏、松山敏広報委員会(新設):安藤厚、新井藤子

(会則第16条に基づく東京事務所)

(所長)霜田英磨、(副所長)熊倉ハリーナ

[第5号議案]2022年度活動計画について(ラファウ・ジ
ェブカ)1.《第35回定例総会》札幌エルプラザ4F中研修室、20
21年10月31日(日)13:30~《第99回例会》第10回
「午後のポエジア」動画鑑賞会、15:00~

2.例会等

(1)《第97回例会》講演と交流の集い「石川慶監督ポー
ランド映画の魅力語る!」北海道クリスチャンセンタ
ー、9月17日(金)18:30~20:45、参加者12人(2)《第98回例会》ポーランド名画ビデオ鑑賞&交流会
2021『COLD WAR あの歌、2つの心』札幌エルプラ
ザ、10月1日(金)18:30~20:45、参加者19人(3)午後のポエジア、名画ビデオ鑑賞会、ポーランドサ
ロン等

(4)紙芝居「ピウスツキ」の増刷と寄贈

(5)2021年秋~23年秋を創立35周年記念行事期間
とし企画(祝賀会[2022年秋]、コンサート[2023年
初夏]等)の検討・準備を開始

(6)その他

3.会誌 POLE No.104(2021.9.1)、No.105(2022.
1)、No.106(2022.5)

4.運営委員会 4回程度

5.オンライン広報(Facebook, Twitter等)の活用

6.その他の後援・協力依頼には随時対応

[第6号議案]2022年度予算(案)について(園部真幸)
別紙 p.19参照

[第7号議案]その他

2021年度 収支決算書 (自2020年9月1日～至2021年8月31日) (単位:円)

【収入の部】	予 算	決 算	備 考
会費	240,000	287,000	全額(3千円×98人)の98%
寄付金	50,000	61,000	
雑収入	10	3	貯金利子
小 計	290,010	348,003	
前期繰越金	366,940	366,940	ゆうちょ銀行
合 計	656,950	714,943	
【支出の部】			
事業費	100,000	31,639	34総会&シロンスク動画鑑賞会31,639
連絡費	100,000	73,609	郵送・はがき・切手外
編集費	64,000	55,639	POLE101-103号制作外
会合費	20,000	1,083	運営委員会1回(持ち回り除く)
事務費	28,000	25,953	インクカートリッジ、ラベルシール、印刷用紙外
雑費	5,000	15,588	HP経費・振込手数料・「ピウスツキ忌」式花代10,000
予備費	339,950	0	
小 計	656,950	203,511	
次期繰越金	0	511,432	ゆうちょ銀行・北洋銀行
合 計	656,950	714,943	

【特別会計「シロンスク」オンライン公演】

	収入の部	支出の部	備 考
助成金	171,738		シロンスク舞踊団より
一般会計より補助	214		
オンライン公演経費		171,952	チラシ1,738、定形外封筒25,930、会場使用料12,700、告知・原稿製作費121,000外
合 計	171,952	171,952	

【演奏部会基金】

	収入の部	支出の部	備 考
前期繰越金	71,767	0	北洋銀行
特別会計より繰入	0	0	
利息(北洋銀行)	0	0	
合 計	71,767	0	次年度へ繰越

会計の監査にあたり、関係書類及び通帳を照会した結果、適正に処理されていることを確認しましたのでここに報告します。

2021年10月26日 監査委員 嵩文彦 印 / 稲川和幸 印

2022年度 収支予算案 (自2021年9月1日～至2022年8月31日) (単位:円)

参考

【収入の部】	前年度決算	予 算	備 考	2019決算	20年度決算
会費	287,000	240,000	3千円×80人(納入率85%)	264,500	244,000
寄付金	61,000	60,000		68,000	70,000
雑収入	3	8	貯金利子	140,002	2
小 計	348,003	300,008		472,502	314,002
前年度繰越金	366,940	511,432		153,552	293,113
合 計	714,943	811,440		626,054	607,115
【支出の部】					
事業費	31,639	100,000	総会&動画鑑賞会4万、例会4回×1.5万	103,529	64,640
連絡費	73,609	100,000	ポーレ発送等(2.5万×3号)、その他DM2.5万	105,313	79,834
編集費	55,639	70,000	ポーレ印刷費(1.7万×3号)、その他チラシ等1.9万	73,995	52,081
会合費	1,083	20,000	運営委員会他(4回)	19,872	10,274
事務費	25,953	28,000	用紙、文具、コピー他	24,832	28,418
雑費	15,588	5,000	HP経費(前年度実績程度)	5,400	4,928
予備費	0	488,440		0	0
小 計	203,511	811,440		332,941	240,175
次年度繰越金	511,432	0		293,113	366,940
合 計	714,943	811,440		626,054	607,115
演奏部会基金			備 考		
前期繰越金	71,767	71,767		34,697	71,767
特別会計より繰入	0	0		37,070	0
利息(北洋銀行)	0	0		0	0
合 計	71,767	71,767		71,767	71,767

POLE no.105 (January 2022)

Newsletter of the Hokkaido-Poland Cultural Association

Table of Contents

Report: 35 th Annual Meeting & video screening of the 10 th reading session "Afternoon Poesia" on 31/10/2021 (A. Ando, K. Kumagai, R. Rzepka, M. Sugawara & T. Ujima)	1
Looking up to the dignified and beautiful poet Wisława Szymborska – Improvisation (N. Nagaya)	3
Report: Lecture and dialogue "Director Kei Ishikawa Talks about the Appeal of Polish Cinema!" on 17/09/2021 (M. Sonobe) / Krzysztof Kieślowski's Films and F.M. Dostoevsky (M. Ikeda)	4
Report: Video screening of Polish film "COLD WAR" on 01/10/2021 (M. Sonobe, N. Nakamiya & M. Osanai)	5
Takako Tokuda's Piano Recital in Nakasatsunai Village (Y. Murata) / Haiku Yearbook: Poland & Japan 37 (Monika Tsuda, Piotr Wrzeciono and Ch. Simoda) / Self-introduction by a new member (M. Koshino)	7
(New Books) "Nobel Lecture: The Tender Narrator" by Olga Tokarczuk (N. Nagaya) / "Niezwyyczajony" by Stanisław Lem, a new translation (K. Miyakaze)	8
"Po drugiej stronie okna - Opowieść o Januszu Korczaku" by Anna Czerwińska-Rydel (Ch. Tsukamoto, K. Kumagai) / "Conversation with Svetlana Aleksievich: Seeking the Voice of the 'Little People'" (G. Koshino) / "A Collection of Poems: The Case of Taichi" by Taichi Kato (J. Murata)	10
Students' impressions of the online concerts "Podróże ze Śląskiem" and "EXODUS" by the ensemble „Śląsk” (A. Matsui)	13
Impressions of the online concert "Podróże ze Śląskiem" (J. Murata, M. Ikeda, T. Ujima, M. Ogawa, M. Koshino & N. Nakamiya)	14
News from Instytut Polski w Tokio: New Director Urszula Osmycka, 10 th Anniversary Gala Dinner on 01/12/2021	16
Agenda for the 35 th Annual Meeting	(appendix) 17